The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中学生における思春期危機について : 一般中学生と不登校中学生に投影法を用いて行われた調査の文献研究から
Author(s)	赤川, 力
Citation	大阪大学教育学年報. 2016, 21, p. 13-27
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57427
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中学生における思春期危機について
―一般中学生と不登校中学生に投影法を用いて行われた調査の文献研究から―

赤　川　　力

和文要旨

本研究は，わが国の一般中学生と不登校中学生に投影法を用いて行われた研究から，中学生における Kretschmer（1949/1958）の思春期危機について検討したものである。目的は，１.一般中学生における思春期危機について，２.不登校中学生における思春期危機について，明らかにすることである。

方法は，わが国における現在までの一般中学生と不登校中学生に投影法を用いて行われた研究の文献検索であった。

結果を大まかに５つに分けて考察した。一般中学生と思春期危機は深く関連していると考えられた。次いで，不登校中学生にも思春期危機は深く関連していると考えられた。一般中学生においては不安が無意識に潜在している状態であるが，不登校中学生においては不安が意識にまで溢れており，意識が不安に対処出来ていない状態と捉えられた。

また，本研究の限界である投影法の文献研究という点についても触れた。今後の課題として，発達障害の中学生における思春期危機の研究と，発達障害の不登校中学生に投影法を用いて行われた研究の必要性を挙げた。

Ⅰ．はじめに

近年，わが国の中学生を取り巻く問題は不登校，いじめ，虐待，非行など多岐に渡っている。その中でも不登校は依然として大きな問題である。平成25年度の長期欠席者（30日以上の欠席者）は小学校で２万４千人，中学校で９万５千人とされている（文部科学省，2014）。小学生と中学生の不登校者数を比較すると，約４倍の差がある。不登校はなぜ中学校で急増するのであろうか。中１ギャップなど様々なことが考えられているが，この現象の理由の１つに思春期危機が挙げられる。思春期危機“adolescent crisis”とは，Kretschmer（1949/1958）によると，「疾病でも神経症でもなく，むしろ思春期と密接な関係をもつ限局された体質的な時間的経過であり，かなり強い社会的な影響を伴う人格的成熟の困難である」としている（注１）。一般中学生（注２）や不登校中学生の理解のために，両者と思春期危機との関連を明らかにすることは，大きな意義があると言える。

本研究では，一般中学生と不登校中学生を対象に投影法を施行した文献研究を通して，１.一般中学生における思春期危機について，２.不登校中学生における思春期危機について，の２つについて文献概観し考察したい（注３）。なお，文献は投影法を用いるものに限り検索，採用した。投影法は人格を査定する際に用いられることが多いが，質問紙法とは異なり，被験者は自由に反応することが出来る。反面，意図して反応することが出来ない。それゆえ，無意識的，潜在的な特徴を捉えることが出来る。山中（2003）は，投影法の１つであるバウムテストについて「『たった一本の木の絵』を見るだけで，その人の人となりの一断片

が実に鮮明に語られている」と述べている。断片的であるが，質問紙法とは異なった角度から人格の潜在的な部分を映し出すことのできる投影法を用いることは．本研究における一般中学生と不登校中学生の思春期危機との関連を見出すために有益であろう。

Ⅱ．方法

1．対象とした文献

(1) 一般中学生の研究

わが国における現在までの一般中学生を対象とした投影法を用いた研究について，文献検索を行った。現在までに発表された，一般中学生を対象に投影法を用いた著作１編を含む17編である。

(2) 不登校中学生の研究

わが国における現在までの不登校の中学生を対象とした投影法による研究について，文献検索を行った。現在までに発表された，不登校中学生を対象に投影法を用いた14編である。

2．分析方法

まず，文献の研究要旨，目的，結果と考察について概観した。次に，考察された主な内容を大きく分けていった。その結果，大まかに５つのグループに分類された。そして，その５つのグループそれぞれを命名した。この過程において命名された分類が，①家族・友人関係，②環境的側面，③情緒的・行動的側面，④病理的側面，⑤援助の在り方，である。その後，５つに分類された内容について，さらに細かく下位分類に分けていった。下位分類においては，１つしかグループが見出せない場合，２つ以上のグループを見出す場合，とそれぞれいくつかのグループが見出された。最後に，見出された下位分類を命名していった。このような過程で見出された下位分類の項目を表１に示す。一般中学生の研究内容は ①家族・友人関係 a)家族から友人関係へ，b)友人関係から再び家族へ，②環境的側面 a)過去の中学生と現代の中学生の比較，b)文化差などからみた中学生，③情緒的・行動的側面 a)男子・女子の傾向，b)攻撃衝動，活動性，不安や葛藤，④病理的側面 a)敏感さ，未熟さ，b)不安と葛藤，c)思春期危機，⑤援助の在り方 a)不器用さ，無自覚さ，b)家族・学校からの援助，に分けられた。不登校中学生の研究内容は①家族・友人関係，a)家族・対人関係，b)他責傾向，②環境的側面 a)時代の違い，診療科の違い，b)進学という環境変化，③情緒的・行動的側面 a)未熟さ，未成熟，④病理的側面 a)回避的，警戒的など，b)強迫的，完璧主義的など，c)抑うつなど，d)慎重さ，感受性の強さなど，e)自己抑制的，無力感など，f)依存，不安など，g)内的衝動性の強さ，統制力の低下など，h)内的葛藤など，⑤援助の在り方 a)内的資質，内的変化，b)内省と社会化，c)多様な援助，d)居場所，e)慎重な対応，に分けられた。

また，時代の変化や文化の変化などの要因によって同じ投映法のテストであっても，結果が異なる可能性がある。そのため，研究内容が５つの側面に分類される際に，研究発表年に偏りがないように配慮した。そして，時代の変化や文化の変化に着目した研究内容は，環境的側面に分類した。さらに，わが国の一般中学生と不登校中学生を対象とした研究に限定したため，諸外国の中学生を対象にした研究は除外した。

表１　研究内容の５つの分類と下位分類

一般中学生	不登校中学生
①家族・友人関係	①家族・友人関係
a）家族から友人関係へ	a）家族・対人関係
b）友人関係から再び家族へ	b）他責傾向
②環境的側面	②環境的側面
a）過去の中学生と現代の中学生の比較	a）時代の違い，診療科の違い
b）文化差などからみた中学生	b）進学という環境変化
③情緒的・行動的側面	③情緒的・行動的側面
a）男子・女子の傾向	a）未熟さ，未成熟
b）攻撃衝動，活動性，不安や葛藤	
	④病理的側面
④病理的側面	a）回避的，警戒的など
a）敏感さ，未熟さ	b）強迫的，完璧主義的など
b）不安と葛藤	c）抑うつなど
c）思春期危機	d）慎重さ，感受性の強さなど
	e）自己抑制的，無力感など
⑤援助の在り方	f）依存，不安など
a）不器用さ，無自覚さ	g）内的衝動性の強さ，統制力の低下など
b）家族・学校からの援助	h）内的葛藤など
	⑤援助の在り方
	a）内的資質，内的変化
	b）内省と社会化
	c）多様な援助
	d）居場所
	e）慎重な対応

Ⅲ．結果と考察

一般中学生と不登校中学生に関する文献を表２・３に示す。考察は，それぞれの５つの側面において，その都度行った。そして，最後にまとめて考察を行った。

1．一般中学生を対象にした研究

(1) 家族・友人関係

①家族・友人関係

a）家族から友人関係へ

池田ら（1982）は中学生にとって家族・友人には肯定的であるが，教師には年齢とともに拒否的な傾向が強まっており，父親には母親と比べて疎遠で，その傾向が年齢とともに増加していることを明らかにしている。河野ら（1983）は，中学生は次第に自分のまわりの大人への依存性が減り疎遠になり，それに代わるものとして友人関係が求められるが，友人関係は必ずしも豊かではなく，より内面化するお互いの悩みを支え

合うほど充実したものではないと考察している。そして，佐藤・鈴木（2009）は中学生の一部の群に外面的な友人関係における態度と，内面的な友人への要求の間に不一致がみられ，相反する友人への要求をもつという葛藤を抱えていることを明らかにしている。

表２　一般中学生の研究概要一覧

研究者（発表年数）	一般中学生の研究概要
野沢・清水（1969）	小学校１年生から中学校３年生まで108名にロールシャッハ・テストを施行検討。
小沢（1970）	２歳から14歳までの20名から30名にロールシャッハ・テストを実施検討。
越智（1975）	幼稚園１年から中学３年までの11年間に縦断し16名にロールシャッハ・テストを施行検討。
宇田川（1980）	中学生男子21名に３年間縦断してロールシャッハ・テストを実施検討。
藤岡（1981）	地形的，時間的に比較的閉ざされた地域の中学生38名にロールシャッハ・テストを施行検討。
池田ら（1982）	中学生497名に文章完成法テストを施行検討。
河野ら（1983）	中学生204名に文章完成法テストを施行検討。
柳・岡部（1985）	両親の教育，経済水準の高い男女各６名に幼稚園卒業時から高校１年在学時まで各年１回，計８回のロールシャッハ・テストを実施検討。
宮澤（1986）	中学生157名にソシオメトリックテストとY-G性格検査，「今の私」を刺激語として35対になった感情語を選択させ検討。
田副ら（1991）	小学生759名，中学生320名に集団法にてバウムテストを実施検討。
小林・小川（1998）	中学生285名にP-Fスタディ（20場面）とストレス想起尺度の質問紙を実施検討。
石田（2004）	小・中学生2152名に「火のある風景」を描いてもらい各特徴の出現率等を検討
松井（2006）	中学生459名に家族イメージ彩色法と社会的スキル尺度の質問紙を実施検討。
佐藤・鈴木（2009）	中学生204名と大学生267名と比較した樹木画２枚法を実施検討。
鈴木・佐藤（2011）	中学生295名に自尊心尺度と被受容感尺度を用いた質問紙と樹木画テストを実施検討。
佐渡ら（2013）	1960年代と2010年代の中学生のバウムテストにおける比較検討。
山下・林（2013）	中学生42名に写真投影法とBirleson自己記入式抑うつ評価尺度などの質問紙を用いて検討
纐纈（2014）	中学生185名にS-HTPを施行し，異質表現カテゴリーを中心に分析検討。

b）友人関係から再び家族へ

池田ら（1982）は多くの中学生が成績・勉強に対し劣等感や嫌悪感を感じており，中学生の関心は年齢とともに金銭や持ち物など物質的なものから，自分自身の能力，性格，容姿などの内面的なものへと変化する傾向を明らかにしている。鈴木・佐藤（2011）は自尊心と被受容感の高低がアンバランスな中学生は自己防衛のあり方と自己を取り巻く人間関係（環境）に問題があると示唆している。さらに，小林・小川（1998）は中学生にとって中学１年生の進学というストレスが最初であり，対外的なストレスを家庭は緩衝する場を担うが，家庭にその機能が果たせない場合にやり場のない不満が捌け口として問題行動へ駆り立てると推測している。

②家族・友人関係の考察

中学生になると，家族という軸から友人関係への軸へと移行していくと考えられる。ただし，この移行は決して順調なものではなく，劣等感や嫌悪感を感じたり（池田ら，1982），自己防衛のあり方と自己を取り巻く人間関係（鈴木・佐藤，2011）があったりと，移行を阻む様々な要因が加わることになる。多くの場合，家庭が緩衝する場を担うのであろうが，家庭がこの機能を果たしていない場合，問題行動へ駆り立てる（小林・小川，1998），ということも十分に考えられる。

(2) 環境的側面

①環境的側面

a) 過去の中学生と現代の中学生の比較

佐渡ら（2013）は明確な結論は出せないものの，私らしさを表現する態度・在り様が，1960年代に比して今の中学生は希薄であるとの仮説を導き出している。

b) 文化差などからみた中学生

藤岡（1981）は地形的，時間的に比較的閉ざされた地域の中学生において，生活様式の変化に対する保守的態度，状況や習慣に対する受動的な態度，安定した内向的なパーソナリティ，女子の方が適応的傾向であること，などを明らかにしている。柳・岡部（1985）は幼少時から知能訓練を被ってきた子どもの特徴について，作られた統制と過剰な課題解決志向型を生じさせ，空想の世界が膨らみすぎ，よりよい対象関係の確立が遅れてくると考察している。

②環境的側面の考察

時代や地域差，家庭環境によって中学生の「私らしさを表現する態度・在り様」（佐渡ら，2013）などに違いが見られている。一方で，友人関係が必ずしも豊かでない（河野ら，1983）ことや，内面的な友人への要求の間の不一致（佐藤・鈴木，2009）など，これらの研究は20年以上開きがあるが，中学生における共通した友人関係の問題が浮かび上がってきている。このように考えると，時代や地域の差，家庭環境を超えた中学生の時期だからこそ存在する問題があると考えられよう。

(3) 情緒的・行動的側面

①情緒的・行動的側面

a) 男子・女子の傾向

宇田川（1980）は男子が中学２・３年次に環境からの刺激に対して情緒面や行動面は直接的な開放性を求め始めるとしている。小林・小川（1998）は男子では他責的傾向と暴力行為，女子は自責的傾向と摂食行為との関連を示唆し，中学生が学校における対人葛藤を最小限に止めようとする努力についても指摘している。

b) 攻撃衝動，活動性，不安や葛藤

石田（2004）は男女共に思春期に入ると「団欒の火」が減少し，逆に「破壊的な火」が増加する傾向を示しており，思春期における本能欲動の高まりや様々なストレスなどから攻撃衝動が高まり，不安や無力感を抱きやすいことを明らかにしている。阿部ら(1989)は，遅刻や早退があっても登校している登校群は意欲・熱意・活動性があると同時に，より環境の刺激に敏感で，不安や葛藤を抱きやすいと考察している（注４）。

②情緒的・行動的側面の考察

男女共に攻撃衝動が高まり（石田，2004），学校での対人葛藤を最小限に留める努力（小林・小川，1998）をしながら過ごしている。しかし，中学生が家族中心から友人関係中心へと移行する中で，どのようにストレスを表出させばよいのか，どう伝えれば理解してもらえるか，あるいは友人に言い過ぎてはいないか，さらに自分のやり方はこれで良いのかなど，様々な不安や葛藤が意識的にも無意識的にも存在している状態と考えられる。

(4) 病理的側面

①病理的側面

a) 敏感さ，未熟さ

宇田川（1980）は中学１年時に感受性や共感性が高まり，中学２年時に性的成熟と対人接触の過度の敏感さから不安がみてとれ，総じて不安の増大とそれに対する知性化について考察している。また，田副ら（1991）はバウムテストの問題指標にて「神経質な」で小学６年，中学全学年，「不安定」で小学４年，小学６年を除いた全学年，「未熟な，劣った」で中学全学年にて高かったとしている。

b) 不安と葛藤

野沢・清水（1969）は小学校低学年では内的葛藤が表面化せず，小学６年以後男女差が明らかとなり，小学６年・中学１年群の女子において思春期的不安の顕在化を認め，同じ群の男子においては自己主張と不安との葛藤を示す思春期的特徴を明らかにしている。纐纈（2014）は中学生の心理的特徴について，防衛の強さ，自己の不確実さ，共感性の乏しさ，対人関係に対する不安や消極性，回避傾向などを示し，これらと思春期心性と関連する発達の偏りや心の病理傾向について考察している。

c) 思春期危機

越智（1975）は男女ともに小学６年，中学３年に拡充期があり，中学１年，２年に抑制期が認められるとし，特に中学３年の男子には思春期危機徴候が強いことを見出している。小沢（1970）は思春期におけるロールシャッハ反応は成人の神経症のロールシャッハ反応と似ていると述べている。

②病理的側面の考察

情緒的・行動的側面とも重なるが，時期に若干の違いはあるものの，多くの研究に思春期特有の不安が指摘されている（野沢・清水，1969；纐纈，2014など）。小沢（1970）は思春期のロールシャッハ反応には成人の神経症のそれと似ていると述べている。このような中学生の時期について，思春期心性（纐纈，2014）という表現している研究もあれば，思春期危機（越智，1975）と表現している研究も見られる。これらの研究から，中学生の時期には思春期特有の不安があると考えてよいのではなかろうか。病理的側面を正しく理解するためには，個人の精神発達や環境の影響から個人差があったとしても，見えにくい部分を考慮に入れておく必要があると思われる。つまり，一般中学生には思春期危機という一貫して潜在している不安があると捉えておくべきと考えられる。

(5) 援助の在り方

①援助の在り方

a) 不器用さ，無自覚さ

山下・林（2013）は女子抑うつ群では，自分自身にも友人関係にも自信がない上に，抱えている不安やストレスを対人接近行動で代償しえないことが抑うつと関連しており，男子抑うつ群では運動に自信がなく，対人関係を結ぼうとする気持ちは強いが不器用さのためにはうまくいかないことが抑うつと関係していることを明らかにしている。宮澤（1986）は同性の集団から孤立している中学生は自分の持っている活動性を自覚していない点を挙げている。

b) 家族・学校からの援助

小林・小川（1998）は中学生にとって家庭が対外的なストレスを緩衝する場を担っており，中学生が学校という社会的組織における対人葛藤を最小限に止めようとする努力がうかがわれるとしている。松井（2006）は男子にとっての父親，女子にとっての母親は身近な同性の親として，同一視の対象となっているとし，母

親との適度な距離感は男子にとって同年輩集団への関係性を高めていく上で重要であり，女子には両親との親しい距離感が同年輩関係への参加の向上に関わっていると考察している。

②援助の在り方の考察

一般中学生には，病理的側面で考察した思春期危機特有の不安がある一方で，対人関係を結ぼうとする気持ち（山下・林，2013），活動性（宮澤，1986）等の健康さを備えている。そのため，援助者は健康な点を支持しつつ，時には具体的なアドバイスが必要になろう。そして，男子の母親との適度な距離感や女子の両親との親しい距離感（松井，2006）は，一般中学生の友人関係にとって重要な意味を持つと考えられる。同時に，父親は母親と比べて疎遠（池田ら，1982）になる傾向を考慮すると，一般中学生にとって母親は最も重要な援助者と思われる。また，中学生は大人への依存性が減り疎遠（河野ら，1983）になる時期であるため，母親だけに頼るのではなく，普段から様々な立場の関係者が中学生に関わることが求められる。このように考えると，一般中学生には特有の不安である思春期危機があると捉え，母親を中心とした家族や学校，地域などで相互に連携しつつ，それぞれの立場から個々の一般中学生と切れ目のない繋がりを持ちながら支えることが重要と考えられる。

2. 不登校中学生を対象にした研究

(1) 家族・友人関係

①家族・友人関係

a）家族・対人関係

栗岩ら（2002）は不登校中学生には男女共通の特徴として，対人関係への強い関心と不適切感などと共に家庭への不満，本人の未熟さ等を挙げ，その理由として，成育歴や家族関係等を挙げている。村田ら(1968)は不登校中学生が内閉的で社会的協調性に乏しく正常な対人関係に円滑さを欠く傾向を見出している。また，登校拒否児童の両親の特性について，父親には共通した点は見られないが，母親が未成熟な点を見出している。

b）他責傾向

串崎・玉木（2010）は不登校傾向の中学生には欲求不満などを他者や物，環境などに向けやすい傾向にあり，相手にきつく接しても後悔や悪いことをしたという意識を持ちにくいと考察している。

②家族・友人関係の考察

不登校中学生には，対人関係への強い関心（栗岩，2002）はあるものの，内閉的で社会的協調性に乏しく（村田ら，1968），欲求不満などを他者や物，環境などに向けやすい傾向（串崎・玉木，2010）があるため，対人関係の幅を広げることが困難であると言わざるを得ない。さらに，不登校中学生にとって支えとなるはずの，母親が未成熟（村田ら，1968）であったり，家族関係等との関係（栗岩，2002）が機能していない場合も多々あると考えられることからも，対人関係の幅は限定的になると思われる。

表３　不登校中学生の研究概要一覧

研究者（発表年数）	不登校中学生の研究概要
村田ら（1968）	10歳から16歳までの登校拒否児童にロールシャッハ・テストを施行し，年齢を３群に分けて検討。
一谷ら（1981）	登校拒否の中学生37名に対してP-F Studyテストを実施検討。
北村ら（1983）	不登校の小・中学生41名に文章完成テストと樹木画テストを施行し，４群（学校恐怖型，登校拒否型，萎縮型，境界知能例）に分けて検討。
一谷・西川（1983）	中学生の非行児57名，登校拒否児39名にバウムテストを実施し，両群の樹木抽出パターンについて比較検討し，性差，予後の改善，不変などの次元から分析検討。
一谷ら（1984）	中学生の非行児57名，登校拒否児39名にバウムテストを実施し，臨床群（非行対登校拒否），性別（男対女），予後（改善対不変）の３要因から分析検討。
阿部ら（1989）	８歳から18歳までの30名のバウムテストを登校群と不登校群に分け，さらに臨床症状を心気症群，ひきこもり群，家庭内暴力群，無症状群に分けて比較検討。
高橋・真木（1994）	不登校21名の小・中学生にバウムテストを施行検討。
長谷川（1998）	神経症性不登校と診断された中学生以上の対象者42名と，その中で分裂病に移行した高校生１名のバウムテストと統合型HTP法を実施検討。
井口（2001）	中学生以上の不登校症例17例に主題統覚検査（TAT）を用いて健常対照群36例と比較検討。
栗岩ら（2002）	不登校中学生19名にHTPテスト（House-Tree-Person）を実施検討。
川原ら（2003）	起立性調節障害（以下，ODとする）を伴う不登校中学生６名と伴わない不登校中学生５名に樹木画テストを行い，比較検討。
川原ら（2006）	小学６年と中学生のODを伴う不登校小児20名と伴わない不登校小児17名に対して樹木画を施行し，比較検討。
串崎・玉木（2010）	不登校傾向の小・中学生７名にP-F Studyテストを実施検討。

（2）環境的側面

①環境的側面

a）時代の違い，診療科の違い

井口（2001）は強迫傾向や緊張葛藤が強いや内向型が多いといった一般的な不登校の特徴が見られなかった結果から，精神科に受診する事例と小児科に受診する事例の違い，調査された時代の違いなどの理由を挙げている。

b）進学という環境変化

北村ら（1983）は初回不登校時の学年が中学１年に最も多く認められることから，小学校から中学校への環境の変化に適応しきれずに不登校に陥ると考察している。

②環境的側面の考察

一般中学生にとって，中学１年生の進学（小林・小川，1998）が最初のストレスである点と同様に，不登校中学生においても小学校から中学校への環境の変化（北村ら，1983）が問題となっている。このように一般中学生にとって，ストレスとなりうる出来事は，不登校中学生にとっては更に大きな出来事となるのかもしれない。また，一般中学生の研究において1960年代の中学生に比して今の中学生では希薄であるとの仮説（佐渡ら，2013）が導き出されたように，不登校中学生においても調査された時代の違い（井口，2001）による特徴の違いは存在すると思われる。

(3) 情緒的・行動的側面

①情緒的・行動的側面

a) 未熟さ，未成熟

井口（2001）は不登校中学生のパーソナリティの特徴について，有意に反応失敗が多く，また，話を具体化することが出来なかったなどの特徴を自我機能の未熟さと不適応としての不登校と関連づけて考察している。串崎・玉木（2010）は不登校傾向の中学生には学年に相応した社会性のスキルを獲得できておらず，精神的発達にも未熟な面を指摘している。そして，阿部ら（1989）は不登校群ではより防衛力や統制力が低下しており，自我の未熟さを認めている。村田ら（1968）は不登校中学生が非社会的で未成熟な傾向を見出している。

②情緒的・行動的側面の考察

自我機能の未熟さ（井口，2001），精神的発達にも未熟な面（串崎･玉木，2010），自我の未熟さ（阿部ら，1989），内閉的で社会的協調性に乏しく，非社会的で未成熟な傾向（村田ら，1968）など，不登校中学生の未熟さを指摘する研究は多い。不登校中学生は一般中学生と比べた際，精神発達や自我機能が未熟，つまり発達課題が未獲得であったり，年齢不相応で脆弱な自我状態であると言わざるを得ない。

(4) 病理的側面

①病理的側面

a) 回避的，警戒的など

一谷・西川（1983）は，登校拒否の中学生は外界に対して圧力を感じやすく，それに対して萎縮し，回避的で消極的な側面を持つと考察している。一谷ら（1984）は登校拒否の中学生が自我収縮（ego-constricted）的な傾向を示すと考察している。そして，長谷川（1998）は不登校中学生が対人関係に回避的・警戒的になるという特徴を示し，精神的交流の希薄さや，さまざまな感情が抑圧された状態にあるなどとしている。さらに，阿部ら（1989）は分類された一群のひきこもり群について，内向性，社会的関心，傷つきやすさ，防衛力・統制力の低下などの特徴を挙げている。

b) 強迫的，完璧主義的など

一谷ら（1981）は登校拒否群，さらに登校拒否－予後不変群には強迫的，perfectionism的傾向が強いとし，身動きならない異常固着の段階にとどまっていることを示唆するとしている。また，登校拒否－予後不変群には，愛情獲得への要求に対して抑圧のメカニズムが働くとし，同時に無関心をよそおう点を重視している。北村ら（1983）は分類された１つの登校拒否型に頑固で柔軟性に欠ける，また試験に対する不安が強く学校生活に適応しにくい点などを挙げている。

c) 抑うつなど

栗岩ら（2002）は不登校中学生において男女共通して自己顕示欲と抑鬱感情を挙げ，男子の特徴として融通の無さと自我機能の弱さ，衝動性等を挙げ，女子は自己防衛的，現実回避傾向を挙げている。阿部ら（1989）は心気症群に活力の乏しさ，感受性の強さ，抑制傾向を挙げている。

d) 慎重さ，感受性の強さなど

高橋・真木（1994）は不登校の小・中学生には感受性の強さ，慎重さ，意志の弱さ，低い興奮レベル，平静，臆病，飛躍性，即時性，外観軽視，形式感情の乏しさなどを示している。一谷ら（1984）は登校拒否－不変群においては感受性が強く，自－他関係がはっきりしない点を明らかにしているが，登校拒否－改善群においてはこの特徴が皆無であるとしている。

e）自己抑制的，無力感など

川原ら（2003）は，起立性調節障害（以下，ODとする）を伴う不登校中学生は伴わない不登校中学生と比べて，活気に乏しく自信に欠け，他人に対して過度に気をつかい，感情を自由に表現しないなど自己抑制的，依存的であると示唆している。川原ら（2006）は，ODを伴う不登校小・中学生は伴わない不登校小中学生と比べて自己抑制的で，倦怠感などから思うように行動ができずに無力感を抱いていることを示唆している。そして，北村ら（1983）は分類された１つの萎縮型に持続力に乏しい，自分の内面を外へ出せない，自己主張したい気持ちが強いが自分を表現できないなどを挙げている。

f）依存，不安など

川原ら（2006）はODを伴わない小・中学生は伴う小・中学生に比べて依存的であり，些細なことで不安を感じ自信を失いやすいことを明らかにしている。北村ら（1983）は分類された１つの学校恐怖型に不安感が強く自信がない，母親との結びつきが強く，父親との仲が悪いなどを挙げている。

g）内的衝動性の強さ，統制力の低下など

阿部ら（1989）は分類された１つの家庭内暴力群に外界からの圧力，内的衝動性の強さ，統制力の低下，自我の未熟性を挙げている。北村ら（1983）は分類された１つの境界知能例に自己拡大を求めているが，外からの圧力が強すぎる，自信がないなどを挙げている。

h）内的葛藤など

村田ら（1968）は登校拒否児童の13歳から14歳の群に，他群に比べて対人緊張が強く，内的葛藤の存在が自由な表現を阻止し，次第に自らを内閉的な傾向へと追い込んでいく状態がみられるとしている。

②病理的側面の考察

これらの病理的側面の特徴は，先に検討した“未熟”な状態を，病理性という側面から明らかにしていると考えられないであろうか。例えば，未熟なため，回避的（一谷・西川，1983）となったり，未熟ゆえに自己抑制的，依存的（川原ら，2003）となるなどである。さらに言えば，不登校中学生は，一般中学生が抱えている葛藤や不安を，未熟さ故に抱えられずに回避し，不登校状態にならざるを得ないと考えられる。

また，一般中学生と比べて不登校中学生の病理的側面が，より重い病理を表していると捉えられないだろうか。例えば，一般中学生の「神経質な」（田副ら，1991）病理的側面と，不登校中学生の「強迫的」（一谷ら，1981）な病理的側面であれば，ある行動に神経質さが際立ってくると，周囲には強迫的な行為に見えてくる。このように考えると，一般中学生の病理的側面と不登校中学生の病理的側面は，同じ直線上にあると考えられ，いずれも思春期危機が一貫して潜在していると考えてよいのではないだろうか。そうであれば，一般中学生が些細な友人同士のトラブルや教師からの叱責などがきっかけで不登校に至る事例にも説明がつくと思われる。

(5) 援助の在り方

①援助の在り方

a）内的資質，内的変化

一谷ら（1981）は登校拒否－改善群には自己主張，企図の傾向をもち，内的な積極性をもっていることを示唆している。長谷川（1998）は高校生の描画と中学生の描画とを比較した結果，神経症性不登校児の描画は加齢に伴って生理的生産性は増している点を認めている。

b）内省と社会化

一谷・西川（1983）は，登校拒否児は内省的で自己への強いフィードバック傾向の強い側面を持つことを

示すとし，カウンセリングにおいて，内省力や感受性を培うことが大切であり，内的なエネルギーをいかに社会化された形で表出するように指導するかが重要と述べている。串崎・玉木（2010）は，不登校傾向の中学生には社会に適応するために必要な自己主張の力やスキルは持っているが，相手の立場に立って用いることが困難な点としてあることを指摘している。そして，栗岩ら（2002）は不登校中学生には本人の未熟さに注目して自己の成長を促していく対応を挙げている。

c）多様な援助

一谷ら（1981）は登校拒否－不変群には自己主張を抑制しているがために，行動にも改善がみられにくいことを示唆している。川原ら（2006）はODを伴う不登校小・中学生の心理的援助について，受容的対応のカウンセリングで感情表出を促すことが有効とし，個々に応じた全人的テーラーメード治療を行うことが重要と述べている。

d）居場所

串崎・玉木（2010）は不登校中学生について，欲求不満の原因を他者や環境に向けるが，感じたことを素直に表出する児童生徒が多いとし，理由として公的な支援施設に通っていることを挙げている。

e）慎重な対応

長谷川（1998）は神経症性不登校と診断された対象者の中で，経過中に分裂病に移行した１名の描画について，神経症性不登校児の描画特徴とも似ていたとし，診断や治療にあたっては登校困難という現象のみにとらわれず，自我の統合性や分化などについても慎重に探る必要があることについて述べている。

②援助の在り方の考察

援助の際は，内的資質への気付きと成長への変化を待ち，個々に応じたカウンセリングにて内省を促しつつ，社会化する方向に見守る。同時に，カウンセリングなどの援助方法は一つではなく，例えば適応指導教室などの本人が安心して居られる場所や思いを表現できる場所も重要となる。そして，統合失調症などの疾病も視野に入れつつ対応すべきであろう。

Ⅲ．まとめ

1．一般中学生と思春期危機について

一般中学生では，対人接触の過度の敏感さからの不安（宇田川，1980），「神経質な」「不安定」「未熟な，劣った」（田副ら，1991），不安，内的葛藤（野沢・清水，1969），自己の不確実さ，対人関係に対する不安や消極性，回避傾向（纐纈，2014）などが挙げられた。多くの文献に不安が挙げられ，背景に葛藤が推測された。この不安と葛藤こそ「思春期危機」ではなかろうか。そして，このように多くの研究が特有の不安を一般中学生に認められていることから，一般中学生には「思春期危機」が深く関連していると考えられた。この時期は人格の成長に伴う危機であり，不安が無意識に潜在しており，意識への現れ方やその影響の程度が個人によって異なると考えられる。また，このような現れ方は個人差や地域差，年代によって差があることも考慮に入れるべきであろう。援助においては，思春期危機が深く関係していると踏まえた上で，母親を中心とした学校や家庭，地域などで相互に連携しつつ，それぞれの立場から個々の一般中学生と切れ目のない繋がりを持ちながら，一般中学生を支えることが重要であると考えられた。

2．不登校中学生と思春期危機について

井口（2001）や栗岩ら（2002）のように，不登校中学生における自我機能や精神的発達の未熟さを指摘し

ている論文はしばしば見られる。不登校中学生は未熟さが特徴であるとすれば，一般中学生が抱えている不安や葛藤を，不登校中学生は未熟ゆえに抱えきれないと考えられはしないだろうか。そのため，回避することで不登校状態に至るのではなかろうか。先に挙げた，回避的で消極的（一谷・西川，1983），強迫的，perfectionism的傾向（一谷ら，1981），感受性の強さ，慎重さ，臆病（高橋・真木，1994），自己抑制的（川原ら，2003）などの病理的側面は，未熟である不登校中学生の特徴を明らかにしていると考えられる。そして，このように不登校中学生の病理的側面を挙げてみると，一般の中学生の病理的側面と比べ，より重たい表現になっているとも理解できる。例を挙げると，一般中学生の「神経質な」（田副ら，1991），不登校中学生の「強迫的」（一谷ら，1981）である。このように考えると，一般中学生の病理的側面と不登校中学生の病理的側面は同一直線上にあると考えられ，思春期危機は不登校中学生も一般中学生と同様に深く関連していると考えられた。さらに，一般中学生においては不安が無意識に潜在している状態であるが，不登校中学生においては不安が意識にまで溢れており，意識が不安に対処出来ていない状態と捉えられる。このような状況は，多くの場合において不登校という形で行動に現れる。そのために，中学生では不登校が急増すると考えられた。さらに，家族関係の問題や遺伝的要因などの器質的側面などが加わることで，病理がさらに重くなることも考えられる。援助においては，上記で述べたような思春期危機が深く関連していると踏まえた上で，それぞれ個々の事例に応じて対応するという柔軟性を保ちながらも，専門的に特化した援助体制・援助方法で対応をすべきと考えられる。

3. 本研究の限界

本研究における文献は限られたものであり，質問紙法などを含めた文献を網羅したものではない。限られた文献研究であることを明記しておきたい。

Ⅳ．今後の課題

近年，中学生の発達障害については，大きな課題となっている。その中で，このような特性をもつ中学生と思春期危機との関連について，新たな研究が求められる。さらに，発達障害の不登校中学生と思春期危機との関連についても，より多くの投影法を用いた研究の必要性があろう。

注

1. 思春期や青年期という時期は，時代や文化などの捉え方によって，年齢幅の違いがあろう。本研究では，現在の中学生の時期は二次性徴の最中であり，Kretschmer（1949/1958）も「思春期においては，身的成熟諸過程と一致して，心理的な衝動変化が生ずる」と二次性徴について述べており，隔たりはないと考えた。
2. 一般中学生と健常な中学生は，ほぼ同義である。しかし，すべての研究において健康さを確かめる質問紙テスト等を施行していないため，本研究では一般中学生という表記で統一した。
3. 文献検索は大阪大学付属図書館のディスカバリーサービスを用いて「中学生」「投影法」「不登校」のキーワードから文献を検索した。そして，一部の文献は検索した文献の引用文献の中から取り寄せた。また，一部の文献は不登校の小学生や高校生，不登校傾向の中学生を含んでいる。
4. 阿部ら（1989）の研究は，不登校中学生を対象にしたものであるが，通院中ではあるものの登校している中学生を対象にもしているため，一般中学生の研究としても挙げた。
5. 病名の記載については，長谷川（1998）の文献にある通りに記載した。

付記

日頃から温かく見守ってくださり，ご指導いただいております老松克博先生に心より御礼を申し上げます。

文献

阿部清孝・星野仁彦，増子博文・渡辺実・八島裕子・熊代永　1989 「登校拒否児の状態像の推移に伴うバウム・テストの変化」『小児の精神と神経』29(3)，144-150頁.

藤岡新治　1981 「山村中学生のロールシャッハ反応―環境把握からの解釈の試み―」『ロールシャッハ研究』23, 57-69頁.

長谷川裕美子　1998 「描画表現からみた不登校児の検討」『臨床精神医学』27(12)，1547-1555頁.

一谷彊・西川満・林勝造・津田浩一　1981 「パースナリティ・テストからみた中学生の非行と登校拒否―R-F反応と予後を中心に―」『京都教育大学紀要』59, 1-20頁.

一谷彊・西川満　1983 「バウムテストからみた中学生の非行と登校拒否」『京都教育大学紀要』63, 1-23.

一谷彊・西川満・林勝造　1984 「バウムテストからみた中学生の非行と登校拒否―Ⅱ―」『京都教育大学紀要』64, 1-22頁.

井口敏之　2001 「思春期不登校症例におけるパーソナリティの検討―主題統覚検査（TAT）の内容分析から―」『小児の精神と神経』41(4)，233-242頁.

池田由子・河野洋二郎・西川祐一・上林靖子・今田芳枝・田中千穂子・中川幸・森岡恵・須賀芳枝・平田雅子・佐藤至子　1982 「中学生の精神衛生に関する研究　第3報　文章完成法テスト」『精神衛生研究』29, 25-38頁.

石田弓　2004 「子どもの「火のある風景描画法」の描画特徴に関する一研究―「火のイメージ」の検討を中心として―」『臨床描画研究』19，100-119頁.

川原恭子・寺嶋繁典・田中英高・二宮ひとみ・吉川賢二・玉井浩　2003 「樹木画テストからみた起立性調節障害（OD）を伴う不登校中学生の特徴」『子どもの心とからだ』12(1)，81頁.

川原恭子・田中英高・二宮ひとみ・玉井浩・寺嶋繁典　2006 「起立性調節障害を伴う不登校小児の樹木画」『心身医学』46(2)，137-143頁.

河野洋二郎・池田由子・西川祐一・上林靖子・今田芳枝・田中千穂子・中川幸・森岡恵・須賀芳枝・平田雅子・佐藤至子　1983 「文章完成法テストからみた中学生の人格発達」『日本教育心理学会総会発表論文集』25, 374-375頁.

北村栄一・北村陽英・西口俊樹・寺川信夫・福永知子・和田慶治・西浦真理子　1983 「一公立中学校における過去15年間の不登校の実態」『児童青年期精神医学とその近接領域』24(5)，322-336.

小林麻紀・小川雅通　1998 「中学生のストレスとアグレッション―P-Fスタディを用いて―」『日本教育心理学会総会発表論文集』40，175頁.

纐纈千晶　2014 「中学生のS-HTPについての基礎研究―異質表現カテゴリーを中心に―」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』61，85-93頁.

Kretschmer, E. 1949 Pschothrapeutische Studien. Stuttgart: Thieme.（新海安彦訳　『精神療法』岩崎書店　1958 104．151頁.）

栗岩瑞生・渡辺タミ子・大山建司　2002 「House-Tree-Person testを用いた不登校児の心理分析」『山梨大学看護学会誌』 1 (1)，13-17.

串崎教子・玉木健弘　2010 「不登校傾向の小中学生が示すPFスタディの特徴について」『福山大学こころの健康相談室紀要』 4，35-41頁.

松井宏樹　2006 「中学生の描く「家族イメージ彩色法」―性差、社会的スキルとの関連から―」『臨床描画研究』21，88-103頁.

宮澤武敏　1986 「中学生が持つ感情の研究 ―ソシオメトリック・テストを利用して―」『上智大学カウンセリング研究』11，39-41頁.

文部科学省　2014 「平成26年度学校基本調査（速報値）の公表について」『文部科学省ホームページ』 http://www.mext.go.jp/component/b_menu/houdou/__icsFiles/afieldfile/2014/08/07/1350732_01.pdf（平成27年10月13日取得）.

村田正次・黒田健次・谷本博司・山内康弘　1968 「登校拒否児童のロールシャッハ反応（続報）」『ロールシャッハ研究』Ⅸ・Ⅹ，31-44頁.

野沢英司・清水晶子　1969 「児童のロールシャッハ反応―各指標の年齢的推移を中心として―」『ロールシャッ

ハ研究』11，139-158頁.
越智信子　1975 「児童のロールシャッハ反応の逐年的研究（Ⅲ）―幼児期より中学３年まで11年間の推移―」『愛媛大学教育学部紀要』22，153-177頁.
小沢牧子　1970 「子どものロールシャッハ反応」『日本文化科学社』169頁.
佐藤秀行・鈴木真吾　2009 「樹木画２枚施行法における樹木の大きさと友人関係との関連」『心理臨床学研究』27(5)，581-590頁.
佐渡忠洋・岸本寛史・山中康裕　2013 「今昔の中学生のバウムテスト表現の検討 ―1960年代と2010年代との発達指標を通して―」『研究助成論文集』49，77-86頁.
鈴木真吾・佐藤秀行　2011 「中学生における自尊心の質と適応に関する一研究―質問紙法と樹木画テストとの比較検討から―」臨床描画研究26，148-165頁.
高橋修三・真木正博　1994 「不登校患者のバウムテスト」『心身医学』34(4)，348頁.
田副真美・石関ちなつ・原節子・中村晶子・中村延江・桂戴作・赤坂徹・白崎和也・前田和一　1991 「健常な小学生、中学生のバウムテスト―全体印象的側面について―」『心身医学』31，119頁.
宇田川一夫　1980 「ロールシャッハテストによる男子中学生の人格発達―中学３年間の縦断的研究―」『日本教育心理学会総会発表論文集』22，968-969頁.
山中康裕　2003 「たましいの形　山中康裕著作集５巻　芸術・表現療法(1)」『岩崎学術出版社』43頁.
山下捻哉・林隆　2013 「写真投影法を用いた思春期の対人関係の解析―自己評価及び抑うつとの関連に着目して―」『臨床描画研究』28，161-166頁.
柳義子・岡部祥平　1985 「ロールシャッハ・テストによる都市型児童の経年的研究」『ロールシャッハ研究』27，83-99頁.

Puberty Crisis among Junior High School Students: Literature Review on Projective Method Studies among Truants and School-Attending Peers

AKAGAWA Chikara

Abstract

The present article discusses the puberty crisis among junior-high school students referring to Kretschmer's (1949/1958) concept of this crisis. We reviewed previous researches carried out in Japan that apply projective methods among truants and their peers who attend school regularly. In so doing, we managed to clarify the specifics of the puberty crisis in each of the two aforementioned groups and classify them into five clusters.

We also arrived at the conclusion that puberty crisis is an important issue for school-attending students. Therefore, it should be so also for their truant peers. That is especially valid for issues of puberty crisis-related anxiety: anxiety seems to remain dormant in the unconscious mind of the school-attending students, while in cases of truancy it emerges on a conscious level. However, the consciousness of the truant students can hardly cope with such anxiety.

Despite the important conclusions, however, our study remained limited only to literature review of researches that use projective methods. For that reason, carrying out projective method researches on the puberty crisis among truants and junior high school students with developmental disorders will also be well-justified.